# 日本語若者語の特徴と持続年数に関する考察*

金鎔均**
kygyun@cau.ac.kr
柳承熙***
mooncaptain@naver.com

<目次>

1．はじめに
2．若者語の定義
3．先行研究
4．分析対象と研究方法
　4.1 分析対象
　4.2 研究方法
5．分析結果及び考察
　5.1 分析結果
　5.2 考察
　　5.2.1 異なり語数から見た全体的特徴
　　5.2.2 延べ語数から見た年度別・部門別特徴
　　5.2.3 持続年数
6．おわりに

主題語: 若者語(language of young speakers)、特徴(property)、持続年数(durability)、新語(neologism)、流行語(fashionable words)

## 1. はじめに

一般に若者語は若者の間で流行り、若者のみが使用している語という認識が強い。また寿命が短い、軽いなどのマイナス的な意味として扱われる場合も多く、流行語と混用されることも少なくないと思われる。しかし、若者語は円滑な会話を進めるためには欠かせない要素として働く場合もある。米川(1994)は、若者語の七つの機能の中で、相手の感情を害したり傷つけたりすることを避け、相手への印象を和らげる機能である緩衝機能や、会話を盛り上げたりテンポをよくしたりする機能である会話促進機能を挙げながら、若者語が持っているポジティブな側面について述べている。[1] このように、若者語は会話で重要な

* This research was supported by the Chung-Ang University Research Scholarship Grants in 2012
** 中央大学校 人文大学 日語学科 副教授、日本語学
*** 中央大学校 大学院生、日本語学
1) 米川明彦(1994)「若者語の世界　第2回「若者語とは」」『日本語学』12月号、明治書院、pp.129-130

役割を果たしているにもかかわらず、俗っぽくて下品な言葉として扱われ、それほど研究されなかったのは否めない。

従って、本稿では今まで研究対象としてあまり取り上げられなかった若者語の特徴について詳細に考察し、またその若者語がどれほど持続するのかについても共に検討することにする。このような研究は、今後若者語だけではなく、これと密接な関係のある新語・俗語・流行語などの研究基盤となり得るのではないかと思われる。

## 2. 若者語の定義

若者語に関する具体的な考察に先立ち、その概念を定義しておく必要がある。従って、本節では辞典類や諸論文を参考にして若者語および若者語と密接な関係のある新語、俗語、流行語と比べてその正確な概念を探ることにする。

まず、四つの語の中で最も上位概念である新語の定義であるが、『国語学大辞典』に比較的詳細に記述されているので、その定義を引用する。

> 新しくその言語社会に現れた、又は、既存の事物や概念を、新しく表現するために作られ、または正当なその語の自然な語義変化とは言いがたい度を越えた新しい意義を與えられて、その存在権を社会によって承認された語。それまでそのような語形、そのような意義としてその言語社会の語彙の構成要素ではなかった語が新たに出現した時、新語と称される。したがってそれより過去の話しことばにも文字資料にも見當たらない。新語の中、内容や語形の新奇さ面白さでその時の人々に好まれて口ずさまれ、文字言語にも登場するに至ったものは、特に流行語と称する。[2)]

上の定義から、新語は社会変化に伴って新しく出てくる事物や概念を言い表すために造られた語であると定義できる。特に、文末の「新語の中、(中略)流行語と称する」という記述から、流行語が新語の下位概念であることが確認できる。

次に、俗語は米川(2003)で詳しく説明されているので、その定義を引用する。

> 「俗語」とは話し言葉の中で公の場、改まった場では使えない(使えにくい)、語形・意味・用法

2) 国語学会編(1980)『国語学大辞典』東京堂出版, p.528(寿岳章子執筆)

・語源・使用者などの点が、荒い・汚い・強い・幼稚・リズミカル・卑猥・下品・俗っぽい・くだけた・侮った・おおげさ・軽い・ふざけた・誤ったなどと意識される語や言い回しを指す。多くの場合、改まった場で使う同意語またはそれに準じる表現を持っている。主な候補語に若者語・業界用語・隠語・卑語・流行語・差別語の大部分あるいは一部分がある。また一般語の口頭語形がある。[3)]

上記の定義から、俗語は「卑猥」「俗っぽい」「おおげさ」「ふざけた」などの属性のため、マイナス的意味を表す語として用いられることが分かる。特に、「おおげさ」や「ふざけた」という属性を米川は物事を誇張したり言葉遊びなどの遊び感覚で説明しているが、これは若者語の機能の中で娯楽機能とも一脈相通する属性であると言える。また、候補語に流行語や若者語があるという記述から、二つの語は俗語の下位分類に含まれることも窺える。

では、流行語とは何か。『日本語百科大事典』では、流行語を下記のように定義している。

誇張の中に娯楽性を含んだ表現で、そのときどきの世相・風俗を風刺したり、その発音が新鮮・奇抜であったりして、人びとの耳目を引つけ、一時期広く使われたり、印象づけられたりしたことば[4)]

上記の定義から分かるように、流行語には娯楽性、新鮮さ、奇抜さなどの特徴が含まれており、また、流行語を通じて当時の世相や風俗なども窺える。このような流行語は、一般に若い世代、即ち、若者の間でよく使われていると言われるが、これは「若者語は一時的な流行語の意味で使われる場合が多い」と述べた米川(1998)でも確認できる。[5)] しかし、流行語が全て若者語であるとは限らないし、逆に若者語が全て流行語になるわけでもない。例えば、2011年3月11日東日本大震災後、全国各地で「ガンバレ！ニッポン！」というスローガンが流行した。しかし、「ガンバレ」は間違いなく2011年流行った流行語であるが、決して若者語とは言えない。このことから、流行語と若者語には数学の積集合のように共通部分が多いことは認められるものの、全く同じ言葉であるとは言いにくい。

最後に、本稿の分析対象となる若者語の概念について探ってみることにする。米川(1994)は、若者語を次のように定義している。

---

3) 米川明彦(2003)『日本俗語大辞典』東京堂出版, p.687
4) 金田一春彦 外(1995)『日本語百科大事典』大修館書店, p.534(稲垣吉彦執筆)
5) 米川明彦(1998)『若者語を科学する』明治書院, p.17

「若者語」とは中学生から三十歳前後の男女が、仲間内で、会話促進や娯楽などのために使う、規範からの自由と遊びを特徴に持つ特有の語や言い回しである。個々の語について個人の使用、言語意識にかなり差がある。若者言葉[6)]

若者語の娯楽性といった属性は、前述した三つの語、要するに新語・俗語・流行語の定義でも確認できる属性であり、結局四つの語の間にはある程度の繋がりがあると言えるが、これを分かりやすく表で表すと、次のようになる。

<表 1> 若者語・新語・俗語・流行語の主な属性

| 区分 | 若者語 | 新語 | 俗語 | 流行語 |
|---|---|---|---|---|
| 属性 | 娯楽・遊び | 面白さ | 言葉遊び | 娯楽性 |
| | 会話促進機能 | 新しさ | 卑猥 | 新鮮さ |
| | 規範からの自由 | 新奇さ | 俗っぽい | 奇抜さ |

以上の考察から、新語・俗語・流行語・若者語には相関関係があり、この中で一つの語を説明するには他の語が欠かせないことが分かる。そして、時にはある語が同時に新語・俗語・流行語・若者語である場合も充分にあり得ると言える。このような視点に留意しつつ、本稿の具体的な考察を進めることにする。

## 3. 先行研究

新語・流行語・若者語などに関する様々な先行研究の中で、主な研究をまとめると以下の通りである。

西谷(1988)は、放送に現れた新語について述べている。放送での送り手は常に送り手であり、受け手は常に受け手であるため、送り手の言葉は伝達の効率を高めるために、何よりも受け手が理解できる言葉、言い替えれば受け手の情感に訴えるものであるべきだが、実際にはそうでない場合があるという。要するに、送り手にとっては使い慣れた言葉であっても、受け手にとっては耳新しい言葉である場合もあり得る。また、放送では新しい

6) 米川明彦(1994), 前掲書(1), p.123

言葉として初めて使われても、新語および流行語の事典として一般に幅広く知られている『現代用語の基礎知識』に即座に記載されるわけではないと西谷は述べている。西谷の研究は、新語の出現速度において、書籍類より放送の方が速いということを番組を通じて客観的に立証したことに研究意義があると思われる。

米川(1994)は、若者語発生の要因や機能、持続年数について述べている。具体的には、若者語発生の要因には歴史的要因、心理的要因、社会的要因があり、更に若者語の機能には娯楽機能、会話促進機能、連帯機能、イメージ伝達機能、隠蔽機能、緩衝機能、浄化機能の七つの機能があると説明している。また、米川は若者語の掲載年数についても言及しているが、『現代用語の基礎知識』に掲載されている10年間の若者語の見出し語を分析した結果、その平均掲載年数が1.5年であることを明らかにした。米川の研究は若者語の掲載年数、言い換えれば持続年数を書籍を媒介にして、最初に分析したことが特徴であると言える。

篠崎(1995)は、各地域で生み出される新語の実態を具体的に取り上げつつ、その発生のメカニズムについて考察した。意味の類似している二つの語形や表現が接触した時、両者が組み合わさって新しい形式が生じたり、意味の異なる同音の語形が接触する際、混乱を避けるために新しい語形が現れたり、新しい語が侵入してきた場合、旧来の語との間に意味・用法の分担が生じて両者が共存する現象の一つとして造られたりするなど、新語発生のメカニズムについて詳細に説明している。篠崎の研究は、新語発生のメカニズムを多様な角度から分析したことに意義があると思われる。

白同善(2006)は、新語・流行語を通じて当時日本の時代相分析を試みた。その一例として、スポーツ関連用語で最も多かったプロ野球に関する用語を挙げているが、調査の結果、プロ野球関連用語はスポーツ全体の68％を占めるほど圧倒的に多かったという。更に語彙が年度別均等に分布されている結果から、プロ野球が日本の国民スポーツとして定着しているとみなしても差し支えはあるまいと白同善は述べた。そして、「平成景気」「バブル経済」「カード破産」などの語から、経済的に急変し続けた当時の時代相が窺えると述べた。白同善の研究は、新語や流行語が当時の時代相を的確に反映していることを明らかにしたことに研究意義があると言える。

이경규・박미해(2011)は、ウェブサイトに現れた新造語を社会的特徴、文化的特徴、年度別特徴に分けて説明しており、その造語類型についても考察した。分析の結果、新造語には、娯楽機能以外にもその時代の社会現象を反映する役割も担っていることが明らかになった。이경규・박미해の研究は、社会現象の変化を反映しているウェブサイトの用例を分析資料として用いたことに最大の特徴があると言える。

高琇瓊(2011)は、流行語の形態的・意味的特徴に関する分析を行った。流行語は新語と不可分の関係を持つ語であり、その形が一単語に限らず、場合によっては句や文の形もあり得るという。その具体的な方法として、流行語を年度別に分けて形態的・意味的特徴を探ってみると、形態的特徴では混種語が最も多く、意味的特徴では人間と関わりのある流行語が多数を占めていたと高琇瓊は述べている。高琇瓊の研究は、流行語を形態的・意味的特徴といった多様な角度から分析したことに意義があると思われる。

本稿では、以上の先行研究を踏まえつつ、前述したように若者語の特徴と持続年数に関する考察を進めたいと思う。

# 4. 分析対象と研究方法

## 4.1 分析対象

本稿での分析対象は、前述の西谷の先行研究で述べたように新語および流行語の事典として有名な『現代用語の基礎知識』に掲載されている「若者語」である。分析の際は、下記の点に留意しつつ調査を進めた。

一. 2008年から2012年までの『現代用語の基礎知識』に掲載された若者語のみを分析対象とする。
二. 部門の分類法は『現代用語の基礎知識』の分類法に従うことにする。
三. 「カフェる/お茶する」のように、意味は同じであるが、見出し語が複数である場合、最初に出現する一語のみを分析対象とする。
四. 「2チャン/２ちゃん」のように、意味は同じであるが、年度別表記のみが異なる場合、 一語のみを分析対象とする。
五. 持続年数の統計の取り方としては、若者語が1年に1回でも現れた場合、それを1年として認め、その平均を計算することにする。

## 4.2 研究方法

本稿は、具体的な研究方法として3段階に分けて分析を行う。まず、若者語を年度別・部門別に分け、異なり語数および延べ語数別にその全体的特徴や部門別特徴について考察す

る。更に、分析対象である『現代用語の基礎知識』に掲載された5年間の若者語の持続年数についても分析を行い、米川(1994)の先行研究で明らかになった若者語の持続年数との比較および相違点について考察を進めることにする。

# 5. 分析結果及び考察

## 5.1 分析結果

前節での研究方法に従い分析を行った結果、2008年から2012年までの『現代用語の基礎知識』に掲載されている若者語は異なり語数で763語が出現した。それをまとめたのが<表2>である。

<表 2> 若者語の部門別異なり語数

| 部門 | 用例 |
|---|---|
| 行動<br>(91語) | シューゾ―しい、ファブる、受けミン、アピる、そっこう、ガチンコ、ちょっぱや、なるはや、オール、まったりする、匂う、グダる、スル―する、ちぎる、ぼさる、ばっくれる、ドタキャン、ダッシュで、KY、タメ、じもってぃー、サクッと、サクサクいく、まく、ぼこる、キャン待ち、はぶる、よさげ、いじられキャラ、カブッてる、盛る、掘る、よれる、色チェン、キャラチェン、パシる、チラ見、ガン見、上から目線、下から目線、爆睡する、ガン寝、鬼買い、かむ、ちょっぱる、借りパク、セッチャ、ヤンキー、モトヤン、ミンヤク、パギャル、キャバ、キャバ嬢、体入、アリバイ、2チャン、2チャンネラ―、ムチャぶり、AKY、SKY、MKY、JY、グダグダ、シカトする、滑舌、カミカミ、鉄板、ガチで、KYR、いつメン、2度見、ゲキアツ、ゲイな、極い、パクる、異メンツ、ディグる、カラチェン、モタる、デ禁、ネタバレ、事故、他界、パロる、ディスる、どや顔、DQN、ぐるぐるどっかーん、ベントする、マミる、バビ語 |
| 気持ちと<br>ログセ<br>(239語) | …とか（あ)、…みたいなぁ、…って感じ、てか、それって、なんかさあ、なんかー、…じゃん、…じゃないですか、…なんだけど、確に、リアルに、まじ、読めない、ありえない、ないわ~、圏外だ、ありそう、ノーコ―、ビミョ―に、ビミョ―、び、フツーに、なにげに、ギリ、場面で、痛い、撃沈、はまる、つぼる、やりニク、デにく、パニクる、テンパる、ひよる、びびる、ビクった、チキン、チキる、ぱ、ハンパない、とぶ、ぶっとぶ、ぶっとんでる、へこむ、すべる、ひく、ドンビキ、むかつく、キレる、ガンギレ、きょどる、すべる、こわれる、こわれてる、しくる、はっちゃける、パチこく、カンチする、はじける、きてる、いっちゃってる、隠れウツ、逆転、バグってる、終わってる、死んでる、病んでる、入ってる、テンション高い、テンション低い、ノリノリ、アツい、かわいい、カワユス、ヘタレ、なつい、ハズい、きもい、きしょい、グロい、しょぼい、シケた、ベタ、使えねえ、まじぼけ、めんどい、たりー、寒い、チ―ン、~かよー、ガン否定される、あぶない、やばい、いっぱいいっぱい、ブチ上げ、アゲアゲ、しょっぱい、ゆるい、なぞい、むずい、うざったい、ちょうざ、まじうざ、うっとい、うぜえ、ざってえ、自己ちゅー、自己マン、ナル、ダメ出し、真逆、うち（ら)、欧米か、でも そんなの関係ねぇ~、萌え（―)、萌える、…のほう、…になります、どうよ？、あと、で、ぶっちゃけ、~すればいいのに、~って、おい、したら、おはよう、おつかれ~、おひさ、チゲ―よ、ゴミン、すまそ、ありませそ、サーセン、カッケェ―、~だからー、オラオラ、ちょ、どんだけ~？、いかほど？、ギザドン、~しない？、~くない？、すごくない！、好きくない、~なくなくない、ぜんぜん、俄然、マジ~、めちゃめちゃ、がんがん、…すぎ、きたねー、キタ―、そっちかよ、マジっすか？、った―く―、なんでやねん、そっか　そっか、やっぱ、さりげに、でうよネ、しかも~だし、とりあえず、とりま、ヤだから、超~なんだけど、ばち、鬼、めっさ、アウェイ、プチウツ、NW、昭和、ドンマイ、まぶい、じかじょう、ななめってる、ザ |

| | |
|---|---|
| | ル、カオス、チョリ~ッス、何も言えねー、な~に、やっちまったなー、スタッフー、いってき、いってら、意味わかんない、ありが、若干、基本~、ホッコリする、エモい、エッジがきいてる、MT、~ねー し、へェー、あると思います、ぜんぜんぜんぜんぜんぜん、ないないないないない、もち、~じゃない、すごい、がっつり、ヒャクパー、~はないだろ、フツー、っぽい（な）、ハンチュー、アリ、心が折れる、リア充、パニ障、コスパ、オキニ、逆に、ド~、マジ、~的な、無駄に、無敵、重い、ヤラかす、リア終、イラッとする、あげぽよ、さげぽよ、メルトダウン、完璧、ムリっしょ、~してきちゃった、ともったんだよ、だれとく、ウ―イ、何がですか？、マジない、~しすぎて死にそう |
| 遊び<br>(111語) | プロフ、デコメール、写メ、写メ交、メル交、プリ交、プリ帳、レタ交、パイ写メ、顔写メ、メル友、イタ電、イタメ―、メルアド、着メロ、ワン切り、ぶるっぱ、鬼電、デコ電、家電、亀レス、番通、ケ―番、バリサン、バリ０、機変、ちゃっきょ、しかメ、エロフリ、ホメパゲ、オフ会、パケ死、パケ放、地デジ、アナデジ、駐、駐取り、免取り、ファミ駐、100パー、ひとカラ、ゲ―マ―、格ゲ、モバゲ―、ギャルゲ―、こもる、ミ―ツ、TDL、TDS、TDR、ググる、焼く、落とす、JK、HP、チャカレ、マニる、あど変、姫電、要チェケ、オケる、タクる、アポる、ゴーグル、ヤホ―、KD、DD、絡む、レキジョ、鉄女、わさお君、女子サー、カキコ、コメする、自撮り、ピンプリ、着歌、デコデコ、アフター、ネトゲ、ドンキ、無印、ラス買い、ツイる、フォローする、フォロア―、マイミク、Wi-Fi、ガラケ―、ジョジョ立ち、女子会、変顔、赤外線、パ千屋、ガススタ、オワコン、リプ、ツイ飲み、スマホ、デキジョ、女子力、ガールズ・トーク、サギプリ、逆パカ、オレコツ、カメラ、ヨドバシ、コミケ、ドドスコスコスコラブ注入、情弱 |
| 名詞系<br>(9語) | …系、OOっ子、いやし系、…状態、モード、…的、気分、~感、なう |
| 人間関係と<br>日常生活<br>(100語) | キャラ、天然、ロリ、モテ男、ウ"ィジュアル系、バンギャ、イケてる、イケメン、ママサー、ギャルサー、ギャル男、ださ男、ぺき男、リ―マン、リ―ター―、フニ―ター―、ぎってる、テカる、が、ワッキー、プヨってる、メタボってる、ゆきち、野口さん、樋口、じもぎ、月9、専門、自校、コピる、カラコ、げんちゃ、半ケツ、にけつ、チャリ―タ、就活、卒アル、サマセ、シンデレ系、モノホン、立ちっぱ、やりっぱ、ちゃけば、デカッ、薄ッ、ハヤッ、マスト、ガッキー、オグシオ、同クラ、JK、チャラい、蟹工、HD、ポスドク、塾講、ルーズリ、シンデレ、オラにャン、花男、松潤、ポッタリアン、ニコ中、神、DK、沼、メンズ、ポニョる、メガる、PK、婚活、離活、オ―キャン、ヤンデレ、にゃんにゃん、バッキー、マッパ、置きっぱ、エイトプリンス、玉鉄、G、同担、認知、ユトリ、キチク、育メン、イケサマ、シャイン、グラセン、伸び代、もしドラ、のぞみん、オシメン、ネ申、降臨、タヒ、OPP、NNT、ワンチャン、マルモリダンス |
| ファッション<br>(81語) | ダメージ、スキニ―パンツ、レギンス、A系、B系、なま足、鼻ピ、センターガイ、おばかわ、エロイ、エロカワ、はでかわ、エロカッコイイ、見せT、しゃかしゃか、はみパン、エクステ、カラー、勝負服、紺ソ、二―ソ、絶対領域、おそろ、色ち、ヘビロテ、Sブランド、かわ足、アゲ嬢、スカルプ、グラディエーター―、カラコン、キンパ、ロンスカ、ロンT、読モ、ジレ、コーデ、21、H&M、リセッショニスト、シュシュ、デギンス、パンダル、プリチ―プ、プチプラ、デコリ、愛されOO、エロい、デカかわ、パチエク、ヘッドアクセ、ニコイチ、二娘一、二虎一、ブラバ、モテ、モテテク、森ガール、B.B.ワンピ、おしゃP、GAGA様ファッション、ロンパ、バリエ、ブ―サン、ハワジュ、ナチュかわ、つけま、ハラキャミ、サブバ、赤文字系、青文字系、山ガール、写ガール、釣ガール、オシャンティ、シャレオツ、カチューム、ダテメ、グロかわ、ユルかわ、ドクカワ |
| 性<br>(59語) | 撃つ、ゲットする、やりとも、ヤリサー、ヤリコン、一発やる、エッチする、やりまん、やりちん、やり逃げ、ダ―、ハラミ―、ハラミ婚、バカップル、よめ、だんな、ラブラブ、元カノ、からっから、告る、逆ナン、泊コン、昼コン、えんこ（―）、路チュー、ばけ乳、がせぱい、生乳、はみ乳、まめにゅう、B専、でぶ専、ぬく、手マン、むく、おかず、おもちゃ、着エロ、エロプリ、極エロ、パネェ画、カレセン、リクラブ、モナる、デキ婚、フリー、モトサヤ、草食系男子、肉食系男子、S、M、胸キュン、キュン死に、まっぱ、虚乳、妄撮、イケ雰、ロールキャベツ男子、即ハメ |
| 食<br>(73語) | スタバ、スタバる、タリる、ドトる、カフェる、マック、ケンチキ、ロッテ、ファッキン、ミスド、デニる、ジョナる、ジョナ勉、ガスる、らーく、ロイホ、サイゼ、ファミレ、バミる、よしぎゅう、よしぶー、吉る、松る、ぎゅう、つゆだく、鬼だく、ねぎだく、飲み、食べ、飯る、がっつり食べる、ガン食い、ゴン食い、宅飲み、リバースする、ウ―茶、ウ―ハイ、ローソる、セブン、ファミマ、エーピー、ビニる、ビニ弁、自弁、家弁、キャラ弁、ゴチる、マヨラ―、こっさり、プクる、プクいち、ヤニーズ、ヤニ切れ、モス、スイパラ、マクる、たこパ、なべパ、2G、ジンジャラ―、スポドリ、合う、B級グルメ、ちょい足し、ドリバ、店飲み、弁当男子、時短料理、メシうま、ひとり飯、カラアゲニスト、バインミ―、消毒 |

## 5.2 考察

### 5.2.1 異なり語数から見た全体的特徴

まず、異なり語数からみると、「気持ちとログセ」関連の語が239語で最も多く出現した。これは、若者という世代の特徴と関係があると見られる。申熙英(2001)が指摘したように、若者は他人や自分の状態に関心が強くて精神的に未熟な時期であるため、人の状態や性質に関する語を次々と新しく作り出している7)からである。このような若者の特徴が言語生活に反映されて上記の結果に繋がったと思われる。また、「気持ちとログセ」部門には、他の部門に比べて「…みたいなぁ」「…じゃん」といった文末を濁す表現、あるいは「なにげに」「…って感じ」のように、無意味な語を語尾に付け加えて発言の意味範囲を広くする曖昧な表現が多く出現した。このようなことから、最近の若者は断定を避け、はっきりしない表現を好んで使用する傾向があると判断される。8)

次に、「行動」関連の語は、合計91語の内、約1/3に当たる29語が動詞であることが明らかになった。また、動詞では「ファブる」「グダる」「パシる」「パロる」のように、活用語尾である「~る」を付けて動詞化した11語の出現が特徴であると言える。和語は一般に造語力という観点からみると、漢語に比べて造語力が非常に弱いと言われるが、上記の例のように、若者語においては「~る」を付けて動詞化する方法で和語の造語力向上を図っているのが窺える。

「遊び」関連の語は合計111語出現したが、その中で「写メ」「パイ写メ」「顔写メ」の「写」ように、混種語で意味の核をなす部分を各単語に付け、バリエーション豊かな新語を作り出していることが特徴である。これは「写メ交」「メル交」「プリ交」の「交」、「鬼電」「デコ電」「家電」の「電」のような例からも確認できる。この特徴は、意味が類似している二つの語形や表現が接触した時、両者が組み合わさって新しい形式が生じやすい現象をよく表している例である9)と言える。また、「着メロ」「Wi-Fi」「地デジ」「スマホ」などの語が多いことから、若者の主な関心分野がITや情報通信であることも明らかになった。

「名詞系」関連の語は、「…系」「OOっ子」「いやし系」「…状態」「モード」「…的」「気分」「~感」「なう」が出現し、5年間の用例が9語しかなかったが、その9語は全てが単独では使用されにくく、他の品詞と結び付いて数多くの新語を生成できる語であることを考えると、見出し

---

7) 申熙英(2001)「若者ことばの使用実態に関する一考察」『日語日文学研究』第38輯 韓國日語日文學會, p.84
8) これは申熙英(2001), 前掲書(7), p.90の指摘、つまり断定を回避する表現を若者が好んで使うのは自分自身の発言に対する自信の無さや相手と一緒でないという不安心理が内在しているからであるということと一致するものと思われる。
9) 篠崎晃一(1995)「新語の発生のメカニズム」『日本語学』5月号, 明治書院, p.19

語の少なさに比べて、造語力は強いと言える。

「人間関係と日常生活」関連の語は合計100語出現したが、「モテ男」「イケメン」「ギャル男」「ださ男」など、男性の外見を指す語が多いことが特徴である。昔は社会活動が男性中心に行われたが、現在は女性の社会進出もかなり拡大した。これらのようなことからの影響のために、男性は社会的業務能力のみならず、自分の外見にも気を使うようになったことに起因する結果であると思われる。そして、「就活」「婚活」「卒アル」「自校」のように今時の若者の関心事を表す語も多く出現した。この内、「就活」と「婚活」は当時の社会像をよく反映している語である。例えば、「婚活」という語は2008年に『婚活時代』という本が出版されてから本格的に用いられ始めた語である。2000年代後半は、大学を卒業し、就職と共に自然な成り行きで結婚できない時代であった。このような社会的な雰囲気が若者の言語生活にも影響を與え、「就活」「婚活」といった新語の登場に繋がったと思われる。

「ファッション」関連の語は合計81語出現したが、「山ガール」「写ガール」「釣ガール」など、「女性」に関する語が目立つのが特徴である。これは、男性より女性の方が流行に影響されやすくファッション分野に興味を持っているという一般の常識とも関係があると思われる。しかも、「~女性」や「~女」ではなく、「~ギャル」というカタカナで表すことによっておしゃれで洗練された感じを醸し出そうとするとする試みが面白い点である。

「性」関連の語は合計59語出現したが、「草食系男子」「肉食系男子」のように性欲に対する極端な態度を表す語が目を引く。日本では2000年度後半から元気のない若者の代名詞として「草食系」という言葉が流行っていた。「草食系」は最初草食動物のように温順な性格の持ち主である男性を指す言葉であったが、最近は性欲をあまり感じない男性を指す意味として使われている。一方、性欲旺盛で日々の生活の中をそれだけに執着している男性を指す「肉食系男子」という語も若者の間ではよく使われている。このことから、最近の若者は「性」に対して一方向に偏りすぎた極端的な態度を取っていると言える。

最後に、「食」関連の語は合計73語出現したが、その中で「スタバ」「ドトる」「マック」「ロッテ」のように特定の店の名前を用いて造られた語が目立つ。「スターバックス」「マクドナルド」「ロッテリア」などは、今時の若者たちの集いの場であり、そこで会話が頻繁に行われるため、それが言語生活にも現れた結果である10)と思われる。また、「ビニ弁」「自弁」「家弁」のような語から、日本独特の食文化も窺える。

以上の異なり語数からみた結果をまとめると、語彙数は「気持ちとログセ＞遊び＞人間関

10) 金鎔均・徐慶元(2012)「日本語略語の位置づけと若者語における造語法」『日本語学研究』第33輯, 韓国日本語学会, p.9

係と日常生活>行動>ファッション>食>性>名詞系」の順であることが確認できた。

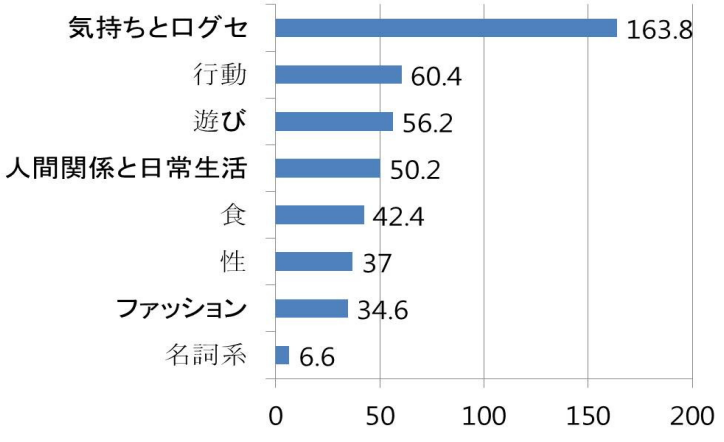
### 5.2.2 延べ語数から見た年度別・部門別特徴

全体的考察から一歩進んで年度別・部門別特徴を把握するため、前節の<表2>の結果を再度年度別・部門別延べ語数で分類してみた。その内、「平均」のみを分かりやすく<図1>で表してみたが、その結果は次の通りである。

<表 3> 若者語の年度別・部門別延べ語数

| 年度 / 部門 | 2008 | **2009** | 2010 | 2011 | 2012 | 平均 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 行動 | 57 | **62** | 63 | 60 | 60 | 60.4 | 302 |
| **気持ちとログセ** | **170** | 175 | **164** | **154** | **156** | **163.8** | **819** |
| 遊び | 54 | **51** | 55 | 58 | 63 | 56.2 | 281 |
| 名詞系 | 7 | **7** | 6 | 7 | 6 | 6.6 | 33 |
| 人間関係と日常生活 | 49 | **51** | 53 | 48 | 50 | 50.2 | 251 |
| ファッション | 24 | **30** | 37 | 39 | 43 | 34.6 | 173 |
| 性 | 41 | **42** | 38 | 34 | 30 | 37 | 185 |
| 食 | 53 | **41** | 38 | 38 | 42 | 42.4 | 212 |
| 合計 | 455 | **459** | 454 | 438 | 450 | 451.2 | 2256 |

<図 1> 若者語の部門別延べ語数の平均




まず、年度別合計では、2009年の若者語数が最も多く出現したが、5年間の比較という側面からすると、出現頻度数に大差は見られなかったと言える。これは、恐らく編著者の編

集方針によるもので、毎年新しく出てくる若者語を全て取り扱うわけにはいかず、その年に編集された若者語のみを記載することに起因する結果であると思われる。

次に、部門別分析の結果、若者語の中で最も多く出現した部門は「気持ちとログセ」関連の語であり、5年間の合計が819語で全体の36.2%を占めている。その次が「行動」関連の語で302語(13.4%)、「遊び」関連の語が281語(12.5%)、「人間関係と日常生活」関連の語が251語(11.1%)、「食」関連の語が212語(9.4%)、「性」関連の語が185語(8.2%)、「ファッション」関連の語が173語(7.7%)、「名詞系」関連の語が33語(1.5%)という順であった。この結果、つまり合計の順は＜表3＞と＜図1＞を通して確認できるように平均値の結果と同じ順であることがわかる。

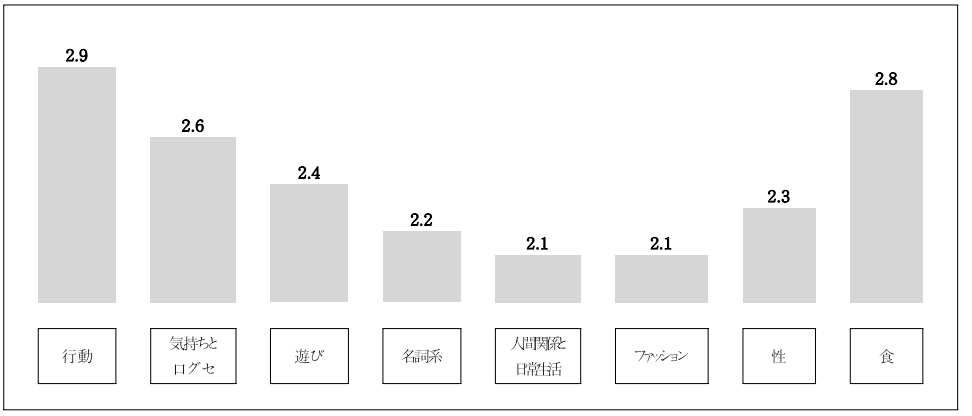
特に、ここで注目されるのは「気持ちとログセ」関連の語である。なぜならば、他の部門の語に比べて著しく高い比率を占めているからである。先行研究で述べたように、米川(1994)は若者語発生の要因を歴史的要因、心理的要因、社会的要因の三つの要因で分析しているが、上記の「気持ちとログセ」関連の語は米川が言及した三つの要因の内、心理的要因と密接な関係があると思われる。米川が指摘したように、青年期は自我の目覚めと自他の比較による劣等感・優越感が現れるため、若者語、特に、中高生の言葉には人を評価する言葉、それもマイナス評価語が多い[11]からである。例えば、「びびる」「キレる」「終わってる」「死んでる」「きもい」「うざったい」「自己ちゅー」のように、否定的な語が今度の調査でも数多く登場した。このことから、心理的要因が「気持ちとログセ」の発生に多大な影響を及ぼしたものと推定できる。

### 5.2.3 持続年数

今度は若者語がどのくらい持続され、消滅していくのかという持続年数について考察してみる。分析した結果を部門別に分かりやすく図で表すと、下記のようになる。

11) 米川明彦(1994), 前掲書(1), p.126

<図 2> 若者語の部門別持続年数




上記の<図2>の結果から分かるように、若者語の部門別持続年数の内、「行動」関連の語が2.9年で最も長く持続し、「ファッション」・「人間関係と日常生活」関連の語は2.1年でそれほど長く続かないことが明らかになった。「ファッション」関連の語は、若者が流行に敏感で、季節ごとにファッションに関する新しい商品や用語が必要であるため、毎年新しく出てくる若者語の数が多く、その流れも速いことから、持続年数が短くなったと判断される。同じく、「人間関係と日常生活」関連の語の持続年数が短いことも、日常生活で常に接している語が多いため、言語の入れ替わりも他の語に比べて速いことによるものと思われる。

以上の部門別持続年数を平均すると、全体の持続年数は2.4年となる。これは米川の指摘した持続年数と異なるということから注目を引く。既に、米川(1994)が、1980年から1993年までの『現代用語の基礎知識』に掲載されている若者語の見出し語を分析し、その全体の持続年数が1.5年であるということを明らかにしたからである。この両者の違いは、なぜ生じたのであろうか。これは分析対象にした資料(『現代用語の基礎知識』)の時期的なずれに起因すると思われる。米川が調査対象にしたのは、1980年から1993年までの資料であるのに対して、本研究では2008年から2012年までという最近の資料を調査対象にしたからである。

日本は1980年代から1990年代初まで経済的好況期を迎えた。当時は、経済的に豊かになり、消費に明け暮れていた時代であったが、このような生活パターンが言語生活にも影響を與え、日々新しい語ができて消滅していくという言語的循環を速める結果を及ぼした。[12] しかし、1990年代に入ってバブルがはじけて日本経済は長い不況に入り、現在までその状況が続いている。このような経済的不況はまた言語生活に影響を與え、新語の生成速度を

12) 米川明彦(1994), 前掲書(1), p.127

遅らせたと言える。その結果、米川の先行研究とは異なり、持続年数が長くなったと推定される。

## 6. おわりに

一般に若者語は「言葉の乱れ」の代表としてみなされ、しかも一過性の取るに足りない言葉であると言われてきた。しかし、若者語はその言語を使用している社会から生まれてきた社会の産物であり、言語の変化という側面からも重要な意味を持つ語であると言える。それで、本稿は研究対象として敬遠されていた若者語を『現代用語の基礎知識』という書籍を参考にしてその特徴および持続年数について考察を進めた。その過程で得られた結果をまとめてみると、下記の通りである。

一. 異なり語数からみると、「気持ちとログセ」関連の語が最も多く出現したが、これは他人や自分への関心が強くて精神的にも複雑である若者という世代の特徴が言語生活に反映された結果であると思われる。

二. 延べ語数からみた年度別合計では、2009年の若者語数が最も多かったが、5年間の比較という側面からすると、年度別出現頻度数に大差は見られなかった。

三. 延べ語数からみた部門別分析の結果、最も多く出現した部門は「気持ちとログセ」関連の語であり、しかも人を評価する語やマイナス評価の語が多かった。

四. 若者語の部門別持続年数は、「行動」関連の語が最も長く持続され、「ファッション」「人間関係と日常生活」関連の語はそれほど長く続かなかった。また、全体の持続年数を計算すると2.4年となり、米川の先行研究の1.5年より長いことが確認できた。

本稿では、若者語の特徴とその持続年数に焦点を当てて考察してみたが、若者語発生のメカニズムや構成成分に関する考察は今後の課題にしたい。

**【参考文献】**

高琇瓊(2011)「日本語の流行語の形態的･意味的特徴について」『日語日文学』第52輯 大韓日語日文学会、pp.49-62

金鎔均・徐慶元(2012)「日本語略語の位置づけと若者語における造語法」『日本語学研究』第33輯 韓国日本語

学会、p.9
白同善(2006)「新語・流行語를 통한 日本의 時代相 分析」『日語日文学研究』第59輯 韓国日語日文学会、pp.235-252
申熙英(2001)「若者ことばの使用実態に関する一考察」『日語日文学研究』第38輯 韓国日語日文学会、pp.84-90
이경규・박미해(2011)「日本語 新造語 生成의 特徴에 관한 考察」『日本近代学研究』第32輯 韓国日本近代学会、pp.29-42
金田一春彦 外(1995)『日本語百科大事典』大修館書店、p.534(稲垣吉彦執筆)
国語学会編(1980)『国語学大辞典』東京堂出版、p.528(寿岳章子執筆)
篠崎晃一(1995)「新語の発生のメカニズム」『日本語学』5月号 明治書院、pp.18-24
自由国民社(2008)『現代用語の基礎知識』、pp.1338-1344
_____(2009)『現代用語の基礎知識』、pp.1196-1202
_____(2010)『現代用語の基礎知識』、pp.1190-1197
_____(2011)『現代用語の基礎知識』、pp.1245-1252
_____(2012)『現代用語の基礎知識』、pp.1162-1170
西谷博信(1988)「放送と新語」『日本語学』6月号 明治書院、pp.26-31
_____(1994)「若者語の世界 第2回「若者語とは」」『日本語学』12月号 明治書院、pp.123-131
_____(1998)『若者語を科学する』明治書院、p.17
_____(2003)『日本俗語大辞典』東京堂出版、p.687

논문투고일 : 2012년 06월 10일
심사개시일 : 2012년 06월 20일
1차 수정일 : 2012년 07월 10일
2차 수정일 : 2012년 07월 20일
게재확정일 : 2012년 07월 25일

## <要旨>

### 日本語若者語の特徴と持続年数に関する考察

本稿は新語、俗語、若者語、流行語の定義やその関係から『現代用語の基礎知識』に掲載されている若者語の特徴とその持続年数に関して詳細に分析した研究である。考察の結果、下記の四つの点が明らかになった。

一. 異なり語数からみると、「気持ちとログセ」関連の語が最も多く出現したが、これは他人や自分への関心が強くて精神的にも複雑である若者という世代の特徴が言語生活に反映された結果であると思われる。
二. 延べ語数からみた年度別合計では、2009年の若者語数が最も多かったが、5年間の比較という側面からすると、年度別出現頻度数に大差は見られなかった。
三. 延べ語数からみた部門別分析の結果、最も多く出現した部門は「気持ちとログセ」関連の語であり、しかも人を評価する語やマイナス評価の語が多かった。
四. 若者語の部門別持続年数は、「行動」関連の語が最も長く持続され、「ファッション」「人間関係と日常生活」関連の語はそれほど長く続かなかった。また、全体の持続年数を計算すると2.4年となり、米川の先行研究の1.5年より長いことが確認できた。

### A Study on the Linguistic Properties and Durability of Japanese Young Speakers

This article analyzes the properties and durability of young speakers' words contained in『*The Encyclopedia of contemporary words*』from a perspective of neologism, jargons, young speakers' words, and fashionable words. As a result, the study discovers the following 4 characteristics.

1. Vowel variations of young speakers' words: words concerning「mood and oral habit」most frequently emerge in their use, since this tendency is due to the characteristics that speakers of young generation have strong concerns of themselves and mental complexity.

2. The aggregate of the total years from a perspective of young speakers' words as a subject of analysis: young speakers' words of 2009 are predominant in use, but the frequency of emergence of each year does not show a big difference from a viewpoint of the comparison for 5 years.

3. The analysis on each part from a perspective of young speakers' words as a subject of analysis: the most frequent part is related to「mood and oral habit」, those words of which denotes evaluation of people or negative connotation in most cases.

4. Durability of young speakers' words: words associated with「activity」have the longest durability and words related to「fashion」and「personal relationship and daily life」do not last that long. Furthermore, calculating the total years of durability of the words, it is confirmed the fact that the durability of 2.4 years is longer than 1.5 years of the precedent study by Yonekawa Akihiko